

須磨（上）（今様須磨の寫繪）

聚樂の御所の御遊とて

歌舞伎召されて浄瑠璃も

小野のお通が松風に

さて村雨は佐渡島の

お国ときめて行平は

伏見山三が役廻り

面白や

馴れても須磨の夕まぐれ

よそ目にそれと白浪の

寄する渚に恋ひ渡る

蟹には惜しき姉妹が

互ひに思ひ在原の

君に手枕川島の

いつしか深つ鳴海潟

ここは鳴尾の松影に

うらやましくもすむ月の

出汐をいざや汲もうよ

女業にはお恥かしや

裾をからげてかいはり捨てて

脛もあらはにぞんぶりこ

浦のみるめやわかめもままよ千鳥鷗がアレささやいて

昼はエー

浜辺にナアエー汐なれ衣

夜は殿御と濡

衣こちや 知っている

暮をエー松風ナアエ

別れの鐘には涙村雨袖しぼる

こちや 知っている

アア辛気

辛気辛気を汲みわけて見れば月こそ桶にあり

これにも月の入りたるや

月は一つ影は二つ満汐も

恋の重荷と思へばほんに憂しと思はぬ汐路かな

「わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に

三歳此方住みなれて」

「潮汲む業のいとまなみ

お宮仕への嬉しさも」

「言つに言はれぬ私等が

賤しい身にて幾夜半か」

「結ぶ縁の行平も」

「あはれ古へを

「思ひ出づれば懐しや

雲井の上にありし時

月の御会や花の宴

冠装束敵めしう

座に連なれど上の空

宵間にそつと局まち

彼も我等を待ち侘びて

なぞとかこちし爪音に

ツンテンころりんとさせもが露の

命かけたる中々も

今日ばかりとぞ田鶴もなく

疑ひ故に勅勤受け

今さすらへの憂き住居

そのさすらへとやらなればこそ

こんな浦曲へお出でもありて

夢にも知らぬ御姿を

見上げ申して女気に

身にも及ばぬ恋をさへ

須磨のあまりにやる方も

渚の小舟漕ぎ寄せて

心のたけをつげの櫛

さしもよしある御方と

逢瀬嬉しき明暮に

思ひは同じ恋草を結び合せて芦の屋の

仮そめ枕冥加ない

御睦言に引きかへて

今の仰せは憎らしい

私ばかりは変らじと

寄りそふ村雨

松風が

中をへだててコレ妹

姉を差置きまんがちな

行平様はこのわしが

イエエ なんぼ姉さんでも

こればかりは面面しがち

イヤそりやならぬ

イエ私と

常むつまじき姉妹も

色に沢立つ浜千鳥

「風もあらぬにむれ立つ千鳥

さしくる潮の時なるや」

「珍らしさうにそれをまア」

「なぜその様に」

「おつしやるのぢやエ」

「それ」

二人が角めだちやるを見て

千鳥が笑ふ恋争い

仲睦まじう

わつさりと

「浮いて踊の」

「手を揃へ」

一と夜

寝る身を比翼とおもや

立つ名もままの川千鳥

縁も深き友千鳥

夕浪千鳥約束の

月にも雲の村千鳥

一人うき寝を島千鳥

とは知らぬ男のにく小夜千鳥

焦れ

磯千鳥

通ふ千鳥の浦づたい

「サア」これで仲直り

右と左に松風村雨

先へ庵りで待つていや

「そんなら必ず」

「サア行きや」

君が仰せに否ものう

打つれ庵へ急ぎ行く

「勅免によつて帰路の行平」

それと二人に打明けて

言はゞ名残も尽きまじと

包むがうちにさし来る汐

沖の千鳥のたち騒ぐは

はや出船の時来りしか

せめて二人へこの一筆

かたみにそへる烏帽子かりぎぬ

この松ヶ枝に残し置けば

あとにて心なくさめくれよ

この上は猶予は恐れ

いずれ伝てにて呼迎へん

兩人さらば

さらばの声も汐ぐもりしめる心を取直し

御船を指してぞ出で給う。